

それは面白そうに歌やはやしの太鼓で、「トンカラリトンカラリと機の音。お大尽様への嫁入りじゃ。花婿様がおみえじゃ。ひと目みないか。ちょうちんづらりとならぶぞ。」うり子姫は、初めはじいさんのいいつけを守って、返事をしないで機織りしていたんだとお。ところが、おもてはにぎやかで、花婿の迎えの声がし「うり子姫、開けてくれ。行列そろえて迎えにきたぞお。」と。それに供の者も声をそろえていうので、ついさそわれて障子を明け「おはいり」と声を出して迎えたんだとお。開けてみると頼かむりの意地悪者のあまのじやくがづけづけあがってきて、その魔力でうり子姫をとっておさえて、山の中につれて行って殺してしまつたんだとお。そして何くわぬ顔してあまのじやくは、トンカラリと機を織っていたんだとお。夕方じいさんたちが帰ってきて、機織りしているあまのじやくに向つて「何もなかつたかい。」と聞いたんだとお。「はい」とやさしい娘にばけてあまのじやくは答え、そうして嫁入りの日がだんだん近づいたんだとお。

都のお大尽からは立派なおこし入れの荷物が届くやら、かごの用意をしてもらえるやら、毎日たいへんなさわざだったんだとお。そうしてついに婚禮の日となり、うり子姫にばけたあまのじやくは、こし入れのかごに乗り、供の者につきそわれて、じいさんばあさんと山の家から峠にさしかかつたんだとお。そうすると山の小鳥たちが木立ちで鳴く声を、じいさんばあさんは聞いたんだとお。

うり子姫の乗りかあごにあまのじやくが乗りこんだホイホイ

うり子姫の乗りかあごにあまのじやくが乗りこんだホイホイ

じいさんはこの声を聞くと、さてはあまのじやくがいたずらをしたかと、もう娘のいないことに気がついて、深い悲しみに胸つかれ「あまのじやくめ、かたきをとつてやる。」と心にきめて、かごの中のあまのじやくを